

平成 24 年度 私立学校専門研修会・国際教育研究部会 実施報告書

***** 研究のねらい *****

グローバル化に対応した人材の育成 ～日本から海外へ、世界の列国に伍していけるか～

近年、海外へ留学する高校生の減少などから日本の若者の「内向き志向」が指摘されている。内向き志向は必ずしも若者の志向のみに起因するものではなく、景気低迷や教育費の高騰など様々な要因が考えられるが、世界的な競争と共生が進むグローバル社会において、豊かな語学力を身に付け異文化体験を積み世界で活躍する人材を育成することは極めて重要であり、国全体で取り組むべき課題である。

その中で、多言語主義が世界の基調とは言え、学術やビジネスの世界では英語が国際共通語として最も中心的な役割を果たしていることは周知の事実であり、グローバル社会を生きる子どもたちの可能性を広げる重要なツールであるとともに、日本の国際競争力を高めていくための重要な要素になっている。

現在、日本の大学が国際標準である秋入学への全面移行を検討し始めているが、これにより、高校生の多様で柔軟な進路設計を促進するという観点では、海外の大学への進学機会も拡大することになり、その際必要となる英語力を証明するTOEFLやIELTSへの対応は、高等学校の英語教育の中で明確な位置付けの下に行うことが望まれる。更に、語学力をベースに国際標準のカリキュラムによる教育も必要となり、国際的に通用する大学入学資格取得のための国際バカロレア（IB）教育の導入も視野に入ってくる。

本年度は、グローバル化に対応した人材育成の一環として、私立学校における公私国内競争はもちろんのこと、高校教育の国際化、高校卒業生の質の保証の観点から、近年注目されているIB教育の実態や課題等について多角的な視点から研究する。

- ◆ 会 期 ◆ 平成 24 年 9 月 21 日（金）
- ◆ 会 場 ◆ こどもの城研修室 東京都渋谷区神宮前5-53-1
学校法人玉川学園 東京都町田市玉川学園6-1-1
- ◆ 参加人員 ◆ 57名
- ◆ 参加対象 ◆ 校長、副校長・教頭、国際理解教育担当及び一般の教員
- ◆ プログラム ◆

①講演Ⅰ 演題「グローバル化と国際教育」

講師 東 儀 正 人 カ ナ ダ 教 育 連 盟 ディレクター

東京都公立学校の教員として15年勤務。東京都教育委員会指導主事。シカゴ大学院でアドラー心理学を学ぶ。帰国後神奈川県藤沢市に「湘南インターナショナルスクール」を創設。初代学園長。静岡県教育委員会スクールカウンセラー。アドラー心理学カウンセリング指導者。カナダ教育連盟ディレクター。著書等：「外国語教育3 幼稚園・小学校編」（朝日出版）

②講演Ⅱ 演題「高大継続カリキュラムとしてのIBディプロマと世界の大学のIBディプロマに対する評価」

講師 後 藤 敏 夫 ワールドクリエイティブエデュケーショングループ CEO

横浜市出身。上智大学経済学部卒業。1990年に香港で起業。海外子女のための進学教室オービットアカデミックセンターを香港、シンガポールにて設立・運営。各国のインター校生徒の教科指導、GCSE、IBの履修相談等に長年従事。現在は海外大学進学、IELTS等の英語資格試験学習方法の教育セミナーを多数開催するほか、日本の中・高・大学の海外生募集サポート、インター校生徒の成績審査も行う。シンガポール在住。シンガポール日本商工会議所会員。

③学校視察「学校法人玉川学園 国際バカロレア（IB）プログラム」

- ・ 学内見学
- ・ 国際バカロレア（IB）プログラムの説明
- ・ 国際バカロレア（IB）クラス参観

④研究協議（質疑応答）

◆ 日 程 ◆

9 月 21 日 (金)	9	30	10	30	11	30	12	15	13	30	14	15	16	30	17
	受 付	開 会 式	講 演 ①	講 演 ②	昼 食	移 動	学 校 視 察			研 究 協 議 ・ 開 会 式	移 動				

◆ 講師・指導員（順不同） ◆

- 東 儀 正 人（カナダ教育連盟 ディレクター）
- 後 藤 敏 夫（ワールドクリエイティブエデュケーショングループ CEO）
- 中 谷 晴 彦（玉川学園学園教学部 次長「国際バカロレア担当」）
- 高 島 健 造（玉川学園 国際バカロレア・プログラムシニアスタッフ）
- 吉 田 晋（富士見丘中学高等学校 理事長・校長）
- 中 川 武 夫（淑徳SC中高等部 顧問）

◆ 専門委員・指導員（順不同） ◆

- 大 羽 克 弘（千葉英和高等学校 理事長・校長）
- 須 藤 勉（東京学園高等学校 校長）
- 平 方 邦 行（聖学院中学高等学校 理事長特別参与・校務部長）
- 山 中 幸 平（学校法人山中学園 理事長）
- 鈴 木 秀 一（一般財団法人日本私学教育研究所 理事・事務局長）

◆ 事務担当 ◆

- 川 本 芳 久（一般財団法人日本私学教育研究所 主幹）
- 田 淵 輝 夫（一般財団法人日本私学教育研究所 主査）

◆ 日程・プログラム ◆

会場：こどもの城研修室 9階「902・903研修室」

〈司会/講師紹介〉事務局長 鈴木 秀 一

9:30	<p style="text-align: center;">受 付 ・ 資 料 配 布</p> <p>◆ 開 会 式</p> <p>1. 開会の辞</p> <p>2. 挨拶 理事長 吉 田 晋</p> <p style="text-align: right;">所 長 中 川 武 夫</p> <p>3. 専門委員長挨拶 国際教育研究専門委員長 大 羽 克 弘</p> <p>4. 日程説明</p> <p>5. 閉会の辞</p>
10:00	<p>◆ 講 演 I</p> <p>演 題 「グローバル化と国際教育」</p> <p>講 師 カ ナ ダ 教 育 連 盟 デ ィ レ ク タ ー 東 儀 正 人</p>
10:45	<p>◆ 講 演 II</p> <p>演 題 「高大継続カリキュラムとしてのIBディプロマと世界の大学のIBディプロマに対する評価」</p> <p>講 師 ワールドクリエイティブエデュケーショングループCEO 後 藤 敏 夫</p>
11:30	昼 食
12:15	<p>◆ 移 動</p> <p>貸し切りバスにて玉川学園まで移動いたします。</p>
13:15	<p>◆ 学校視察</p> <p style="text-align: center;">「学校法人玉川学園 国際バカロレア（IB）プログラム」</p> <p style="text-align: center;">会場：玉川学園 高学年校舎（学園教学部）</p> <p>①学内見学 ※玉川学園到着後、正門より会場まで徒歩にて学内見学を兼ねて移動します。</p> <p>②国際バカロレア（IB）プログラムの説明 玉川学園 国際バカロレア・プログラムシニアスタッフ 高 島 健 造</p> <p>③国際バカロレア（IB）クラス参観</p>
16:00	<p>◆ 研究協議（質疑応答）</p> <p>司会 聖学院中学高等学校 理事長特別参与・校務部長 平 方 邦 行</p>
16:40	<p>◆ 閉 会 式</p> <p>1. 開会の辞</p> <p>2. 専門委員長挨拶（総括） 専門委員長 大 羽 克 弘</p> <p>3. 閉会の辞</p>
16:50	<p>◆ 移 動</p> <p>貸し切りバスにてJR渋谷駅まで移動し、解散いたします。</p>
18:00	

◆ 概 要 ◆

平成24年9月21日（金）、こどもの城研修室〔東京都渋谷区〕および学校法人玉川学園〔東京都町田市〕にて、「平成24年度全国私立中学高等学校 私立学校専門研修会 国際教育研究部会」を開催した。

当部会の目標は、諸外国の教育制度を研究し、わが国の教育制度との比較などから、「海外在住生徒教育」、「帰国生徒教育」、「外国人生徒教育」、「国際理解教育」等をいかに有機的に連携させるか、また、これらの私立学校の先導的な実践の積み重ねが、公教育全体の発展にどう寄与してきたかについて研究し、更に、国際社会において、グローバルな視野に立って主体的に行動するために必要となる様々な知識やスキルを生徒に習得させるための教育について研究することにある。

今年度は、「グローバル化に対応した人材の育成 ～日本から海外へ、世界の列国に伍していけるか～」を研究のねらいとして、57名の先生方に参加いただいた。

今回は国際バカロレア（IB）をキーワードとして、まず、午前の部は、現在、日本人生徒の海外の学校への進学をサポートされている2人の先生方を招き、IBに関連する世界各国の状況、そのメリット、デメリットおよび現在の世界情勢を含めた講演を行った。午後からは、会場を東京都町田市の玉川学園に移し、現在、日本でIBを実践している玉川学園中高等部の国際バカロレアプログラムについて実情等を聞くとともに学校視察を行った。

実施内容については、下記のとおりである。



◆ 講演 I ◆

「グローバル化と国際教育」

講師 カナダ教育連盟 ディレクター 東 儀 正 人

カナダの、特にブリティッシュ・コロンビア（BC）州の教育プログラムについて、国際バカロレア（IB）のプログラムと比較をしながら、紹介いただいた。

はじめに

東儀氏はインターナショナルスクールを設立し、IBのPrimary Years Programme（PYP）を導入した。IBプログラムは素晴らしいものであるが、かなりのハイレベルと学費が高額である。また、日本の学校や教育システムとインターナショナルスクールが融合した総合評価ができるカリキュラムが理想であるが、IBの場合は完全に日本とIBのカリキュラムの時間が必要であり、子どもの負担も大きい。さらに経営者の負担も大きいということで、IBに代わるプログラムと

してカナダのシステムに巡り会った。

インターナショナルスクールの現状

現在の日本の教育に期待されることは英語のレベルアップである。今後は英語でコミュニケーションし、他国の人種や文化と協働できる人材が必要となる。つまりこれからの教育は、グローバルマインドを持ち、多様な文化とネゴシエーションできる人材をつくる必要がある。

学校教育の中では日本人のアイデンティティが大事である。現在インターナショナルスクールでは英語力と日本語力両方が足りないことが問題となっている。インターナショナルスクールの子どもの日本人のアイデンティティがなくなっている。



カナダ・BC州の教育プログラム

日本に比べて、世界の国の高校卒業資格はレベルが違う。TOEFLやSATで海外大学受験はできるが、海外の高校卒業の資格はない。海外高校の卒業資格を得るためには日本と海外のカリキュラムの時間数に子どもの時間的負担と費用負担が少なくなるような融合があればよい。カナダはそういうカリキュラムである。

カナダには統一の文部科学省等はなく、各州がそのシステムを全部司っており、教育制度・評価も州によって違う。

BC州の教育プログラムはIBに近く、かつ柔軟性がある。このプログラムは、ゴールはあるがプロセスは自由で、評価も自己評価が多く、結果より過程を大事にする。特に、Language Arts（英語の授業）に大きな特色があり、高い評価を受けている。また、BC州の高校卒業資格はドッグウッド（Dogwood）と呼ばれ、海外の大学からも高い評価を受けている。

BC州では評価は「%」で表され、評価50%以上で進学ができ、高い評価ほど、レベルの高い大学に進学できる。落第はほとんどなく、フォローして、何度もテストを行う。

（カナダ教育連盟 ジェイムス・イエロリーズ氏による補足）

カナダは各州により教育制度が異なるため、試験で統一する。入学試験はないが卒業試験があり、必修は必ずパスしなければならない。3年間で48単位を修得する。選択も含めると、全体で80単位を3年間で修得する。

BC州のカリキュラムには、planning10（社会人への準備）、Language Arts（英語教育）、数学、ファインアート（美術・音楽等）、サイエンス、体育（必修）などがある。その他にelective course（日本語もある）、graduation traditions（大学・就職の準備のための科目）がある。

BC州と日本の高校を卒業した証明があるとDual degreeといい、日本の大学へも進学でき、世界中で通用する。Dual degreeの資格のためには、日本のカリキュラムに必要な補正は英語だけで、あとは試験をパスすればよい。ただし最終的には数学や Social Study は英語で出題される問題をクリアしなければならない。

（質問）

Q：BC州プログラム導入の場合のコストは。

A：年間約1500万円程度。導入して以降毎年必要。研修はその学校で行うため、カナダに行く必要はない。カナダの教育省から学校視察の費用はかかるが、それ以外はほとんど実費である。

◆ 講演II ◆

「高大接続カリキュラムとしてのIBディプロマと世界の大学のIBディプロマに対する評価」

講師 ワールドクリエイティブエデュケーショングループ CEO 後藤敏夫

世界の現状と今後の動向

現在、シンガポールには世界中から企業が進出し、人口もかなり増加し、増加人口はすべて流入で、半分はシンガポール国籍を持たない。そのため国際教育が必要となる。シンガポールにはインターナショナルスクールが23校あり、内17校がIBを採用している。

今、アジアの新興国の中間層ラインにビジネスが存在し、日本はこのラインのビジネス競争で遅れをとっている。各国はグローバル人材でマーケティングをしている。日本は国際競争力が弱く、商品開発やマーケティングで完全に立ち後れている。また、日本は今後超高齢化社会となり、GNPが約5割減と予想され、仕事が減り、外資は海外に移る。多くの企業が海外移転すると予想される。

グローバル化で、今後は日本の生徒達の競争相手はmultilingualや留学生となる。これからの若者のキーワードは、「どこにでも動ける」、「どこでも働ける」、「グローバルなネットワーク」である。

海外の大学では様々な国から留学生が集まり、様々な国の人達とネットワークが作られるが、日本は海外からの学生が少なくネットワークを作ることができない。また英語は拡大しつづけ、大学の論文も英語でないと認知されなくなる。

企業に関して言えば、日本の市場が収縮すると、世界を相手にしなければならない。国籍を問わない海外採用の増加やmultilingual、専門性の高い人材を求めていく。

企業に関して言えば、日本の市場が収縮すると、世界を相手にしなければならない。国籍を問わない海外採用の増加やmultilingual、専門性の高い人材を求めていく。

IBディプロマと世界の大学のIBディプロマに対する評価

以上のような世界情勢の中で、IBが大学や企業から高い評価を受けている。

その理由は、レベルの高いリサーチ型の学習、一貫した指導に基づく継続カリキュラム、アンチナショナルカリキュラム（特定の国家の文教政策によらないグローバルなカリキュラム）、オープンなカリキュラム（IBのサイトを見れば内容が全部わかる）があげられる。

IBはPYP、Middle Years Programme (MYP)、Diploma (DP) となるが、PYP、MYPにInternational General Certificate of Secondary Education (IGCSE) のプログラムを採用しDPにつなげていく。日本はPYP、MYPから入る。BCSE（イギリス中等教育課程）にDPをつなげる場合もある。DPは4つ要素で構成され、一つ目は「6教科」（「LanguageA」、「LanguageB」、「人文系の科目」、「Experimental Sciences」、「Mathematics」「Arts」。なおHiger LevelとStandard Levelがある。）。二つ目は「TOK (Theory of Knowledge)」（考え方・知的方法・物事の整理等を哲学的に学ばせるもの。プレゼンテーションがと論文が求められる。）。三つ目は「Extended Essay」（課題論文）。四つ目は「CAS (Creativity, Activity, Service)」（芸術活動・社会奉仕活動・社会問題解決のためのプロジェクト・スポーツ。2年間に150時間。）である。評価は7点×6教科満点42点でExtended EssayとTOKの得点（それぞれA・B・C・Dがつき、組み合わせでMAX3点。1つでもEの場合は落第。）が加算される。世界トップランクの大学入学に必要なスコアは、基準のスコアが38点（できれば42点以上）でTOK、Extended Essay、CASも重視され、また英語力も必要である。



DPのメリットとして、大学1年時履修基礎科目のいくつかが免除、早期卒業可能、奨学金（就職時に明らかに有利）である。

（質問）

Q：今後の日本の教育はどうなるのか。

A：グローバルを認識しないと世界から相手にされなくなる。世界の国々は文化的背景がすべて違う。各国の人達に対しどのようにすれば好感を持たれるのかといった理解教育を底辺からやり直さないといけない。英語教育に関しては、英語を勉強するのではなく、英語で勉強するという方向性に変えないといけない。さらに日本人は標準化が苦手である。オリンピック等でもルールを作る側にならず、いつも遅れる。IBの歴史教育に満州の話があるが、そこに日本の歴史学者が参加していないので観点が他の国のものである。MYPは中国語も可能になりつつあり、DPも同様である。すると中国の主観等が、政治の世界同様に入ってくる。そういうことも含めて考えなければならない。

◆ 学校視察 ◆

「学校法人玉川学園国際バカロレア（IB）プログラム」

午後からは、会場を町田市の学校法人玉川学園に移し、同学園が取り入れているIBプログラムに関して、その内容の説明、IBクラスの様子の見学を行った。

まず、玉川学園国際バカロレア・プログラムシニアスタッフの高島健造氏により、玉川学園IBクラスのカリキュラム等を映像を交えながら説明をいただき、その後IBクラスの見学を行った。なお、IBクラスは初めてのDPの試験を間近に控えており、授業自体は参観できなかったが、授業の合間の生徒の先生との雰囲気などを見学した。

国際バカロレア（IB）プログラムの説明

玉川学園 国際バカロレア・プログラムシニアスタッフ 高島健造

IB導入の理由

玉川学園がIBを導入するに至った大きな要因は、学園の建学の精神ともいえる教育12信条に共通するところが多く、追究し、発展した現在・将来に合う教育ができるという点にある。

IBの教育内容について

講演Ⅱの報告と重複するため省略。

玉川学園が実践 ー日本の高等学校とIBの両プログラムを同時進行ー

1. 時間割：基本的には6時間目まで組み（月～金）、7時間目までの曜日もある。さらに、英語のサポートのため0時間目を設けている。放課後にも各教科のサポートクラスを設けている。ただし、0時間目や放課後のサポートのため、クラブ活動の参加は難しい。

2. 週当たりの授業時間数：中1で31時間（週1回7時間目）、高2のDPは36時間（毎日7時間目。科目によりHigherとStandardレベルに分かれているため時間数が異なる。）で組んで日本の学習指導要領の履修科目を含めている。教科書（検定）は全員に持っているが、予習用である。



3. 成績評価：学習指導要領とIBの方法を合致させる。IBは7段階、玉川学園は5段階評価のため換算表をつくっている。ほとんどの教科はIBの評価の後に5段階の評価にする。これはIBの評価のCriteriaの方が細かいためである。IBの成績表は、教科ごとに各担当が一人ずつコメントを書くため、8枚程度の成績評価票となる（教科でA4版1枚）。評価対象はテスト評価は多くても45%程度で、それ以外は問題解決のための自由な活動や研究が対象となる。ノートのチェックや、授業中のディベートやディスカッション等への参加度・発言内容が評価対象となる。

4. その他：MYPではインタラクトという、玉川学園の12の教育信条、IBの在り方、玉川学園の在り方を理解する時間を設けている。また、MYP修了時にpersonal project（日本では自由研究の時間）を行い、最終的には論文にまとめ、プレゼンテーションを行う（必修）。TOKは11年生で週2時間、12年生で週3時間行っている。Extended Essayは授業時間内ではなく、各自が進め、ホームルームの時間等で先生と相談し、最終的に研究論文としてまとめる。CASについても奨励している。

◆ 研究協議 ◆

学校視察後、玉川学園の高島健造先生、東儀正人先生、後藤敏夫先生およびジェイムス・イエロリーズ氏を交えて、平方邦行専門委員のコーディネーターとして、本研修会の内容をさらに深める形で研究協議が行われた。

この研究協議は、講演等3名の講師への質問形式で行われた。

●玉川学園IBプログラムはエリート教育という観点で始めたのか。また、MYPの生徒がDPへ移っていく割合はどうか。

【高島氏】

エリート教育に関しては、深く考えていない。通常の授業が活発になって欲しいという立場で始めた。黒板・教科書等で説明する授業でないことが魅力的だった。

基本的にはDPへ進むことを前提に受け入れている。つまり、6年間でMYPとDPを行う。教員もMYP、DP両方を担当する。現実問題としては英語力で、テスト等で英語力をチェックし、IB



での継続やDPが難しい場合は、担任とIB教員とコーディネーターが入り、保護者、本人と面談をし、一般コースへ転籍する形をとっているが、このようなケースは少ない。

●シンガポールのインターナショナルスクールのDPは学年進行で、どの程度DPに進むのか。

【後藤氏】

（United World College ・UWCについて）UWCはPYP・MYPを行わず、IGCSEカリキュラムを2年入れた後にDPを2年行う。これはシンガポールは転入転出が多く長期教育が出来ないためである。IGCSEは最後に9教科のテストがあり、全部成績が出る。この成績でHigherかStandardかを決めたり、他の学校に行くように進められる。シンガポールの学校はエリート養成カリキュラムであり、所得の多い人の子弟のカリキュラムである。学費が300万円くらいかかる。

●IBとBC州カリキュラムの違いは。

【東儀氏】

BC州カリキュラムの最大の特徴は、もとはIBであり、PYPとMYPの考え方である。物事を探求していく力からスタートしている。BCのプログラムは全世界に広めていくためにDual

degreeを目指している。ただし一点違うのがLanguage Artsである。

●玉川学園の教育課程はどのようにIBと整合性を持たせているのか。

【高島氏】

特例校申請を出し、学習の順番を変えている。主に中3で高校分野の学習をかなり取り入れ、全体を上手くならして進めている。

【補足：平方委員】

IBの教科で日本の教科は認定されない。従って、両方の課程を履修しなければならない。高校のみの学校では毎日、夜遅くまで授業をしないと履修できないが、6年間なら、高校課程の一部を中学校で履修し、高校の履修科目を少なくしてIBを入れ、Dual degreeがとれるということである。

●シンガポールのIB校は17校程度であるが、IBではないインターナショナルスクールも10校程度ある。いろいろなレベルの学校があると思うが、その実情はどうなっているのか。

【後藤氏】

最近は多くのインターナショナルスクールでDPを積極的に取り入れている。以前は、学校独自のハイスクールディプロマと、IBの2コースがあり、優秀な生徒のみIBプログラムに進んでいたが、現在はすべてIBになっている。IBではないコースはCertificateと言い、IBはHighレベル3教科、Standard3教科であるが、Higerレベル1教科であれば全部Standardを履修させる（DPではないが、スコアを取れば大学入学資格はある）。IBのDP2年間とその前段階の2年の4年間は理にかなっており、DP前に2年やっておかないと科目で点数を取るの厳しい。

●BCプログラムのFee（費用）は年間1500万円程度という話であるが、学年が増えていくと、その分増えていくのか。

【東儀氏】

IBで大きな費用は教師のワークショップで、BC州の場合は小スケールで、取り入れる学校でワークショップをうため費用が少ない。また、BC州の場合は基本的にレギュレーションは変える必要はないが、Language Artsの教師がBC州の教師であることが条件である。英語以外の教科は、その教科が週4時間の場合は、1時間だけダブルティーチングで英語教師が英語を行う。費用は、レギュレーションの調査費用、1年前からの契約で、導入するために毎月4回以上のワークショップ、教科・カリキュラム編成のためのコーディネーターの費用となる。

学年進行での費用の増加はほとんどない。

●Language Artsは週10時間で、1日2時間を5日間やるということだが、学年が増えると授業が倍になり、人件費は増えると思われるが、年間1500万円となると、2クラスになった場合は、倍までは増えないとしても数百万の足し算になるのか。）

【東儀氏】

例えば、Language Artsを受け持った先生に1日5時間やってもらうとか、4時間やってパートタイムで一人雇ってもらう形となる。BCライセンスの先生が一人いて、既存の先生、英語の先生、nativeの先生をうまく活用する。ただ、パートタイムの人件費は増える。

●今後の日本の教育を考える時、格差社会を容認した上でいろいろなシステムを作っていくといけないのか。

【後藤氏】

格差社会はどんどん進行している。グローバル教育の有無で年収格差が開く。その年収差は5倍から10倍である。今アジアの発展国の人にとって教育費用はinvestment(投資)である。例えば、家を売り、子どもに投資し、アメリカの大学に入学させる。政治的問題でもあるが、現実

はそのような状況に進んでいる。

●カナダは経済的に潤い、人口も少ないため、日本だけではなく国際的に留学生を迎え入れ、国力をあげたいと受け取れるが、BC州ではどうか。

【イエロリーズ氏】

カナダは安定していて、平等で、またカナダと日本は、アメリカよりも共通点がある。BC州についてはプログラムも落第がないようなシステムに力を入れており、社会的な問題も少なく、犯罪率も少ない。そういう概念で日本と考え方が合うのではないか。

●玉川学園のIBについてメッセージがあればお願いしたい。

【高島氏】

卒業生をだしていないので分からない部分もあるが、一般的な教員の立場から見て、子ども達の学習に取り組む姿勢、学校生活に臨む姿勢が変わった。授業に参加するようになった。下を見て待っていた子どもが自分から何かしようという気持ちになっている。そういった部分でも学校として変わっていけるということは感じている。取り入れて意味があったと感じている。

●最後にコーディネーターの平方邦行委員より研究協議のまとめを行った。

世界中のインターナショナルスクールは世界の様々な国々で仕事をする方の子弟のために作った学校であり、世界中の学校のCurriculumの長所が集まったNational Curriculumの学校である。そう考えると、日本のカリキュラムはガラパゴス化してしまっている。新聞報道では文科省がDPが取得できるインターナショナルスクールを200校つくと受け取れるような記事が出ているが、最終的にはIBに準じたNational Curriculumを作ろうという意図があるように感じる。今後どう変わっていくか分からないが、グローバル化はどんどん進んでいく。同時にネットワークを作らないと、完全に日本は立ち後れる。2008年のデータでは世界で母国を後にしている若者は330万人。そのうち50%はアジアの若者達である。しかし日本は減り続け、2009年で6万人を切った。世界中の人達が母国を後にし、海外で交流しているが、その中に日本人がいない。それは10年後、20年後日本にとってマイナスとして効いてくるという危惧がある。だから、世界の情勢を見た上で、本当に海外の大学に行って学びたいという子どもを育てていくような教育を私学は考えていく時がきていると思う。

日本の私立学校というのはこういう教育をやっていると、独自性、先進性をしっかりと示しながらやっていけたらいいと思っている。ご協力をお願いしたい。

◆ 総括 ◆

千葉英和高等学校理事長・校長 大羽克弘

最後に、大羽克弘専門委員長が挨拶を兼ね、本研修の総括を行った。

日本の今後の教育を考えた時に、誰でも教育については語れるが、実践的な結果が出るのは数年後である。しかし、グローバル化はどんどん進んでいるという中で、私達ができることは何か、国も焦っているという話もあるが、実践していかなければならない。IBのような学校という話があったが、私学ではそんなこと言ってもらえない。結果を出さないと生徒は入学してこない。各学校の先生方が、本研修会で取り上げたIBやBC州カリキュラムを取り入れる、距離を置く、あるいは咀嚼し取り入れるといったようなことを行い実践していくと思うが、共に頑張っていきたいと思う。



◆ 参加者アンケートより（概要） ◆

講演Ⅰ「グローバル化と国際教育」について

日本の高校卒業資格と海外の高校卒業資格を同時に取得できる Dual Degree に多くの関心が集まっていた。特に、カナダのBC州の教育プログラムをIBと比較したこともあり、コスト、時間的な負担の面からも前向きに検討していくような感想がうかがえた。

講演Ⅱ「高大接続カリキュラムとしてのIBディプロマと世界の大学のIBディプロマに対する評価」について

IBへの関心、評価は、今回の参加の目的とも思われるため、かなり高いようだったが、現在および今後の世界の動きの話には多くの先生方が衝撃を受けたようである。

学校視察「学校法人玉川学園 国際バカロレア（IB）プログラム」について

実際にIBを導入している学校の担当の方からの説明もあり、理解を深めた方も多くいたようである。また玉川学園がIBを導入した経緯にも関心が多く寄せられていた。

研究協議

今回の研修会のまとめとして、最後に理解を深めていく形となり好評であった。

◆ 都道府県別参加者数 ◆

都道府県名	参加人数	都道府県名	参加人数	都道府県名	参加人数
北海道	1	石川	1	岡山	1
青森	—	福井	—	広島	4
岩手	—	山梨	—	山口	—
宮城	—	長野	—	徳島	—
秋田	—	岐阜	—	香川	—
山形	1	静岡	3	愛媛	—
福島	—	愛知	3	高知	—
新潟	—	三重	—	福岡	1
茨城	—	滋賀	—	佐賀	—
栃木	3	京都	7	長崎	1
群馬	2	大阪	3	熊本	1
埼玉	—	兵庫	—	大分	—
千葉	1	奈良	1	宮崎	—
神奈川	3	和歌山	—	鹿児島	—
東京	18	鳥取	—	沖縄	—
富山	2	島根	—	計	57